山田原欽「室積普賢菩薩厨堂梁文」訳注稿

独立行政法人国立高等専門学校機構　徳山工業高等専門学校
一般科目　准教授　谷本圭司

Translation and annotation (draft) of Genkin,Yamada (山田原欽)
"Murodumi Fugen-bosatsu ChuuDou Haribunka (室積普賢菩薩厨堂梁文)
Keiji,TANIMOTO

〔解説〕

「室積普賢菩薩厨堂梁文」は、周防室積（現在の光市室積）の峨眉山普賢寺の普賢菩薩厨堂に掲げられた梁文であり、江戸時代初期の萩藩（長州藩）の秀才とうたわれた山田原欽が二二歳の時に書いた漢文の文章である。

一般に、近世に書かれた寺社の由来に関係する文章は、史実に全くそぐわない妄想による牽強付会の記述が多く、その史料的価値は著しく低いという見解が常識であるが、優れた表現者としての山田原欽の手になるこの文には史実にそぐわない記載は見られず、原欽の平易にして達意の表現をうかがうことができる。

また、山田原欽の漢詩文は、管見の及ぶ限りにおいて、そのほとんどが詳細な注を伴う現代語訳の試みがなされていないため、現代において、その名を知る者はいても、作品そのものを読むことには困難さが伴っていることは事実である。このたび、本校機械電気工学科の藤本浩先生より要請をいただいたのを機に、本校の四年次選択科目の講義用参考資料としての利用をも意図して、才の不足を省みず、訳注を試みることにした。地域に対する貢献という意味でも、ささやかな意味はあるのではないかと考えている。

〔訳注について〕

本文は、一般に目にすることがたやすく、活字に翻刻されている『防長寺社由来』（全七巻　山口県文書館　昭和五七年）第二巻　熊毛宰判所収の「室積村　普賢寺　普賢寺由来記」によることにした。残念ながら、開帳の年に当たらぬため、梁文の現物を見ることはかなわなかったが、普賢寺の桝野省堂ご住職から、昭和三四年に当時の普賢寺の執事が作成した梁文の写しの複写を提供していただいた。これは、『防長寺社由来』の翻刻の誤謬を訂正するための重要な資料であり、『寺社由来』の本文との異同を記しておいた。なお、本文の内容にそって大まかに段落分けを行ったが、これは筆者の考えによるものであり、あくまでも理解に資するためである。

通釈については、徳山高専の学生（四年生）を対象に、努めて平易を心がけて作成した。講義用の資料ととしての配慮ではなく、彼らにとって理解しやすい文となっていれば、一般の方々にも十分に理解できるレベルの文章になるであろうと考えてのことである。しかし、安易な説明に傾きすぎたきらいもあり、また文章としてのリズムが崩れ、原文の格調を損ねた部分もないとは言えない。諸賢のご教示をいただければ、幸いに思う。

注については、典拠のある場合は、管見の及ぶ限りにおいて原文を挙げた。引用原文に訓読文を加えて理解をたすけるべきかとも考えたが、煩雑にわたることを避けることを優先し割愛した。同様の考えに基づき、語意を記すにとどめたものも多い。

【本文】

＊『防長寺社由来』の翻刻に基づき、普賢寺に残る写しと異なる部分については、「＊1」のように示し、後に写しの本文との対校を記した。

室積普賢菩薩厨堂梁文

峩嵋山普賢禅寺正堂既建、未有蔵像厨之処、凡貴賤膜拝亦於堂中、地迫而不便于事。寺現住瑞巌猶憂之、捐資募縁、擬為一宇於堂後、以安置所謂生身普賢菩薩像、営計維勒＊1、旃＊2哉。

防長二州大守＊3大江吉就府君臨邦之日、嘉瑞巌之志之勒＊4也、資以堂搆之材、頃日功成。於是乎位置得宜、衆便之。

亥未省揚梁文、請之於余＊5。々遥書以贈＊6之、＊7祝之以詞。曰、

峩嵋＊8山兮、纔間天兮。
跨白象兮、覩桑田兮。
虹梁挙兮、海霧連兮。
民以富庶兮、百禄鮮兮。

貞享丁卯 仲春廿有八日
　復軒山田原欽熙 把筆於長陽城下

＊1　「勒」、写しは「勤」に作る。
＊2　「旃」、写しは「方」に作る。
＊3　「二州大守」、写しは「二守」に作る。
＊4　「勒」、写しは「勤」に作る。
＊5　この一文を写しは「余未有揚梁文、請文於余」に作る。
＊6　「贈」、写しは「賜」に作る。
＊7　写しには、「祝」字の上に「且」の一字がある。
＊8　写しには、「峩嵋」の下に「之」の一字がある。

【訓読文】

＊写しの本文との異同個所に傍線を引き、写しの本文による訓読を〔　〕内に記した。写しのほうだけに文字がある場合は、〔　〕内にその読みを加えて記した。

室積普賢菩薩厨堂梁文

峩嵋山普賢禅寺 正堂は既に建つるも、未だ蔵像の厨の処有らず。凡そ貴賤の膜拝するも亦た堂中に於いてし、地は迫（せま）くして事に便ならず。寺の現住 瑞巌 猶お之れを憂い、捐資募縁して、一宇を堂後に為（つく）り、所謂 生身普賢菩薩像を安置するを以て、営計維勒せん〔維れ勤めん〕と擬す。旃（よ）きかな〔方なるかな〕。

防長二州の大守〔の二守〕大江吉就府君、臨邦の日、瑞巌の志の勒なる〔勤なる〕を嘉（よみ）するや、資するに堂搆の材を以てし、頃日 功成れり。是に於いてか、位置は宜しきを得、衆は之を便とす。

亥（そ）れ未だ梁文を省揚せず、之を余に請う〔余 未だ梁文を揚げること有らざるに、文を余に請う〕。余 遥かに書して之を贈る〔賜う〕を以てし、〔且つ〕之を祝うに詞を以てす。曰く、

峩嵋山は〔峩嵋の山よ〕、纔かに間天あり〔間天に巉（けわ）し〕。
白象に跨がり、桑田を覩（み）る。
虹梁は挙がり、海霧は連なる。
民は以て富庶たり、百禄は鮮やかなり。

貞享丁卯（貞享四年一六八七） 仲春廿有八日（二月二十八日）
　復軒山田原欽熙 筆を長陽城下に把れり

【通釈】

室積普賢菩薩厨堂の梁文

峨嵋山普賢禅寺は正堂が既に建立されたが、まだ仏像をお納めする厨子の場所が無かった。そのため、貴賤なく膜拝の礼を行うのも正堂の中で行い、場所が狭くて礼拝を行うに不便であった。寺の現在の住職である瑞巌和尚も、やはりこのことを気に病み、喜捨を得、寄付を募って、一宇を正堂の後に造り、いわゆる生身普賢菩薩像を安置して、経営に一心に勤めようとなされたのである。なんと正しきことであろうか。

周防長門二国の大守である大江吉就さまは、御国入りの日、瑞巌の志の真摯さをお褒めになり、その厨堂を建てるための資材を援助され、このごろ完成をみた。ここに至って、位置は理にかなった良いものとなり、人々はこれをよきこととしたのである。

わたくし原欽は、まだ（この偉業を）褒め称える梁文を掲げておらず、梁文を（作るようにと普賢寺より）わたくしに願い求めてきた。わたくしは遥か遠く（離れた萩）の地で梁文を書き記して与え、また厨堂の完成を祝う歌を作った。その歌にいう、〕

峨嵋の山は、静寂な空に険しくそびえ、
（生身普賢菩薩像は）白象に跨がり、桑畑を見ておられる。
（虹の形に反った）梁が上がり、（その梁に）海の霧が連なっている。
民は豊かで多く、多くの幸福はくっきりと美しい。

貞享丁卯（貞享四年一六八七）仲春廿有八日（二月二十八日）
復軒山田原欽熙　筆を長陽城下に把っ（て記し）た（ものである）

【注】

○普賢菩薩厨堂
「厨」は、厨子（神仏を安置する二枚扉の入れ物）のこと。「厨堂」は、厨子を納めておく建物のことである。末尾に付した写真を参照。
『防長風土注進案』熊毛宰判　熊毛郡室積村風土記　寺院　禅宗峨嵋山普賢寺の項に、

同境内
普賢堂
本堂　桁行貳間半梁行同斷瓦葺〔二間半は約四・五五m〕
釣屋　桁行貳間半梁行三間瓦葺
〔二間半は約四・五五m。三間は約五・四六m〕
前殿　桁行五間半梁行同斷瓦葺〔五間半は約一〇m〕
午拝　九尺ニ壹間〔九尺は約二・七三m。一間は約一・八二m〕
鐘楼　八尺四方〔八尺は約二・四二m〕
廊下橋
但、當時石橋ニ相成居候事
右御公儀より御普請
本尊　普賢菩薩
但、生身の靈佛と云、海中より出現

とある。〔メートル法の換算値は筆者の加筆。あくまでも概算値である。〕

○梁文（はりぶん）
寺社の創立の由来が書かれた棟札のこと。また、棟の梁に打ち付けてあるものではなく、厚板に書いて社殿などに懸額してあるものを指していう。

○膜拝（もはい）
ひざまずいて両手を挙げ、地にひれふして拝する礼。『穆天子傳』巻二「吾乃膜拜而受。」の郭璞の注に「今之胡人禮佛、舉手加頭、稱南膜拜者，即此類也。」とある。

○瑞巌
『防長寺社由来』熊毛宰判　室積峨嵋山普賢寺由来記に「廿八世　中興瑞巌寂元和尚　予州大津産　元禄十三年辰六月十四日寂ス」とある。（元禄十三年は、西暦一七〇〇年）

○現住
現在の住職のこと。

○捐資
金銭や財物をなげ出して援助すること。寄付すること。

○募縁
寺の建設の際に金品を奉納すること。奉加のこと。

○生身普賢菩薩像
普賢寺普賢堂の本尊、普賢菩薩像を指す。末尾に付した写真を参照。

○擬
～するつもりである。～しようとする。

○営計
営は、管理する。計は、計画する。「営計」とは、管理運営をはかっていくの意であろう。

○維勒

このままでは意味が通りにくい。「勒」字の草書体に近似の草書体の字には「動」、「勤」があるが、この部分が「維勤」であれば意味は通る。昭和三四年の写しは「勤」に作っているので、ここは、「維勤」として解釈した。「維勤」は、『尚書』周書・周官に「功崇惟志、業廣惟勤。」とある。

○旃哉

「旃」は、『説文解字』には、旗の曲がった柄と定義されている。ほかの意味として、名詞としては毛織物（「氈」に通ず）、代詞として目的語としての用法のみで「これ」、「これ～ことよ」(代詞「之」＋語気助詞「焉」)、いずれも音「セン」の音通による意味であり、この個所の意味としては適切なものが見いだせない。『詩経』魏風「陟岵」に「上慎旃哉、猶来無止」と見えるが、これは「これ～ことよ」（代詞「之」＋語気助詞「焉」）の用法であり、この部分には当てはめることができない。ただ、五代の馬縞の著作『中華古今注』の旌旃の項に「旌者、旌也。旌表賢人之徳。旃者、善也。以彰善人之徳」とあるので、「よきことであるなあ」とこの部分に合う解釈は可能である。

昭和三四年の写しは、「旃」を「方」に作る。「方」であれば、「方正」の意にとって「正しきことであるなあ」の意に素直に解釈できる。どちらの解釈でも問題はないが、この梁文が学識をひけらかすような書き方ではないことを考慮すると、「方」字と取るほうが適切と考える。

なお、「哉」字に該当する部分は「我」字のように書かれているが、草書体が「哉」字に似通っているので、「哉」字と判断してよいと思う。

○防長二州大守

周防長門二国の守護の意。昭和三四年の写しは、「二守」に作っている。どちらでも意味合いは同じであるが、梁文そのものを直接見ることができないために、判定が困難である。あえて言うならば、『防長寺社由来』の本文のほうが、意味合いを取りやすい。

○大江吉就

萩藩第三代藩主毛利吉就〔もうり　よしなり　寛文八（一六六八）年～元禄七（一六九四）年〕。毛利氏は大江匡房を始祖としているので大江氏を名乗る。毛利吉就は、天和二（一六八二）年、父の隠居により跡を継いで萩藩主となっていた。

○府君

府の太守の称。ここでは、大名の尊称として用いられている。

○臨邦

「お国入り」のこと。

昭和三四年の写しには、梁文の前に、棟札の写しが記されており「貞享元　甲子年　　五月吉祥日」（貞享元年は、西暦一六八四年）とある。これは毛利吉就の最初のお国入りの時を指し、この時も山田原欽は主君に随行していた。梁文の「資以堂搆之材」という記述は、貞享元年のお国入りの際に、吉就が瑞巌和尚の志を知り、支援を約した時のことを指しているのであろう。

次いで、毛利吉就は、貞享三（一六八六）年　四月に江戸を出発し国元に向かい、前年の三月から京都に留まっていた山田原欽は、京都から主君に随行する。六月十一日に原欽は「題雲谷等蟠家蔵八景軸」を書いているので、それ以前に萩に到着しているはずである。また、原欽が同じ六月に「峨眉山記」を書いていることから、萩への途次、主君吉就の一行が室積に立ち寄ったことは間違いないと思われ、その際には貞享元年の支援の結果を確認したはずである。〔以上、安藤紀一編『山田原欽』(明倫同窓会事務所　昭和十五年刊　国立国会図書館デジタルコレクションにて公開のもの http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1075070)、渡辺憲司「山田原欽略譜」(渡辺憲司『近世大名文芸圏研究』平成九年二月　八木書店刊　二五六～二六二頁）を参照した〕

○瑞巌之志之勒

ここの「勒」字も、「勤」の誤読である可能性が高い。「勒」字のまま

で解釈しようとすると、不自然な解釈をせざるを得ないからである。昭和三四年の写しは、「勤」に作っており、ここでは「勤」の字として解釈した。「勤」の意味合いは、真摯であること。

○堂搆

堂構に同じ。建物の構えのこと。房舎。陸機「歎逝賦」に「悼堂搆之頽瘁、慜城闕之丘荒。」（『文選』巻）とある。

○頃日（けいじつ）

近ごろ。ほどなく。

○功成

立派に成し遂げる。

○亥未省揚梁文、請之於余

この部分は、『防長寺社由来』の本文に基づいて解釈を試みると、無理矢理にこじつけた解釈にならざるを得ない。まず、「亥」は、この個所に通常用いられるような文字ではないため、あえて解釈するならば、「亥」が「其」字に通ずるとして解釈する以外には方法がない。また、「省揚」も、『防長寺社由来』の本文には、「省」字に「（ママ）」と傍記があり、明らかに判読に苦しんだ結果であることを示している。この部分は、「省」の草書体に、草書体が近似する文字としては、「常」・「道」があることから、意味合いから考えて、「道揚」が一番無理がないため、「道揚」（『書経』顧命に見える語で、ほめたたえること。称揚に同じ）の意にとり、褒め称えて掲げるとでも解釈するしか解決のしようがない。その上で訓読は、「亥（そ）れ未だ梁文を省揚せず、之を余に請う」、通釈は「さて、厨堂には、まだ（この偉業を）褒め称える梁文を掲げておらず、これを（作るようにと）私に願い求めてきた」となるのであろうが、このような持って回った解釈をしなければ解決できないということは、本文の翻刻そのものが誤っていると判断すべきである。

昭和三四年の写しは、この部分を「余未有揚梁文、請文於余」に作っている。次の文にわたって「余」字が多いところにくどさを覚えるが、同時期に書かれた「普賢縁起」・「性空上人碑」に共通する、山田原欽の平易ながらものびのびとした文体に照らして違和感がないため、通釈は写しの本文に基づいて作成することにした。

○々遥書以贈之、祝之以詞

『防長寺社由来』の本文に従えば、「わたくしは遥か遠く（離れた萩）の地で梁文を書き記して贈り、厨堂の完成を祝う歌を作った」という解釈になる。写しの本文は「々遥書以賜之、且祝之以詞」であり、「わたくしは遥か遠く（離れた萩）の地で梁文を書き記して与え、また厨堂の完成を祝う歌を作った」となるであろう。いずれが優れるかは即断できないが、執筆に並行して祝いの歌を書いたと明記する形の写しのほうを是として通釈した。ただし、「贈る」と「賜（目上の者から目下の者へ与える）」では印象の違いが大きく、この部分は「贈」を是とすべきかもしれない。

○峨眉山

写しは、「峨眉之山」に作っているが、歌の形としての形式上は、一句の字数がそろっているほうが良いと考える。読みの段階で「峨眉の山」と読めばよいからである。

○纔

「纔」の意味は、やっと、わずかに。この意味ではしっくりこない。昭和三四年の写しは「巉」（険しいの意）に作っており、そのほうがこの部分の意味として自然である。

○間天

静かな天空。閑天。用例としては、曹唐「小遊仙」詩 其二に「風動閒天青桂陰、水精簾箔冷沉沉」とある。

○百禄

数多くの幸福。百祥。『詩経』小雅「天保」に「磬無不宜、受天百禄」とある。

○鮮

美しい。鮮やかである。平声先韻。

○把筆

執筆。

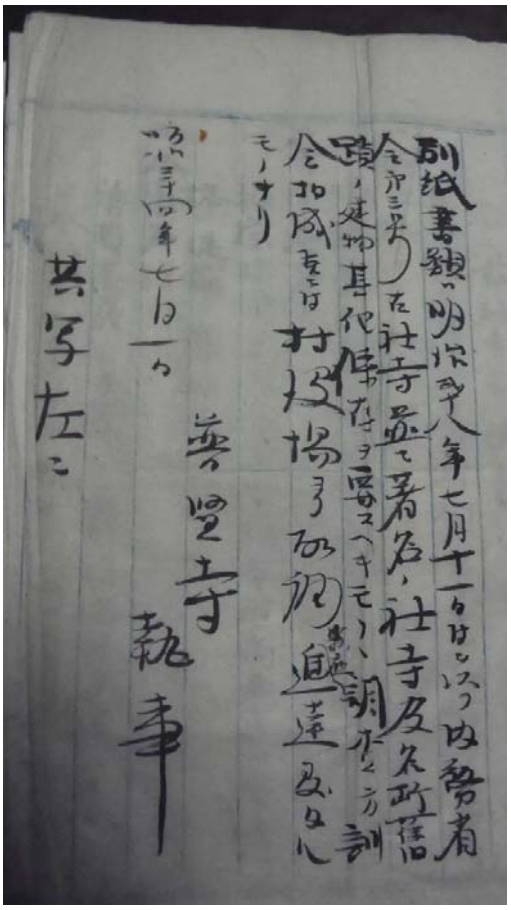
○長陽城

萩城のこと。

【付】

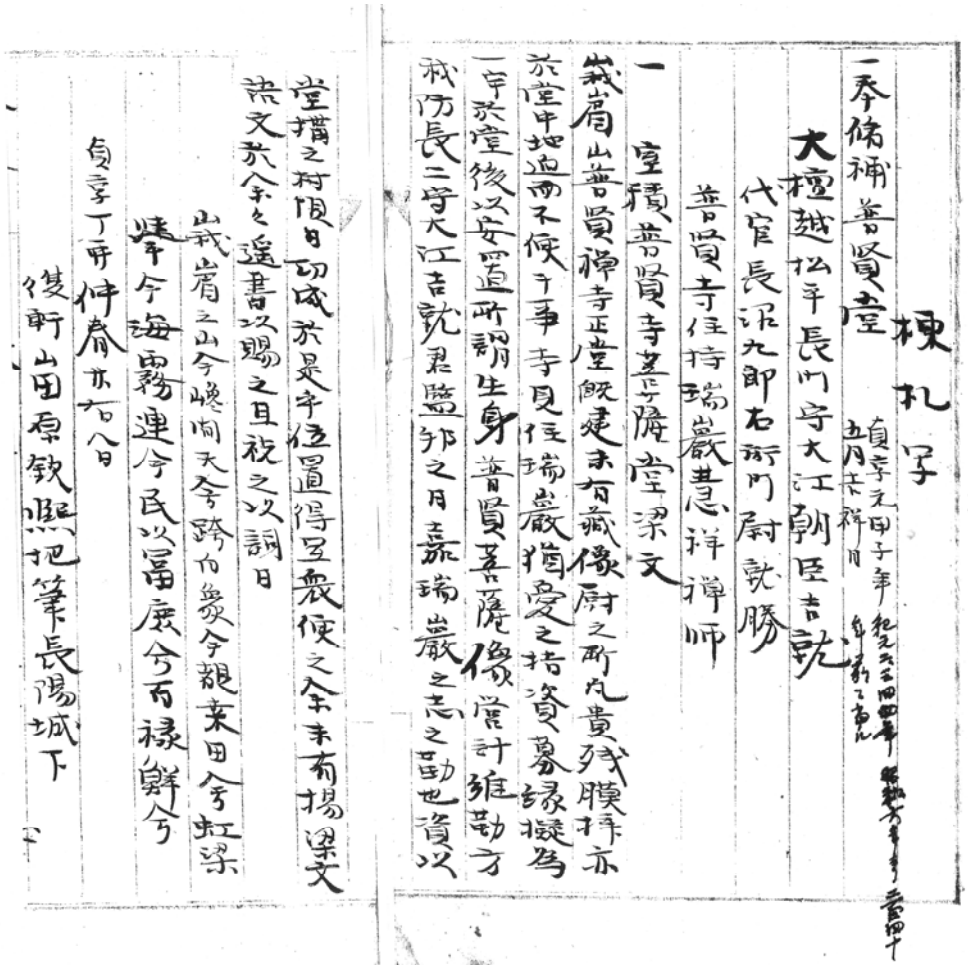
写真①　昭和三四年の写しの冊子表紙（筆者撮影）

明治二八（一八九五）年七月一一日に内務省に提出された別紙書類があり、昭和三四（一九五九）年七月一日に、それらをまとめて書き写したと記されている。



写真②　昭和三四年の写し　梁文の該当部分

棟札に「貞享元　甲子年　　五月吉祥日」（貞享元年は、西暦一六八四年）とあり、これは毛利吉就の最初のお国入りの時を指し、この梁文の二年前ことになる。この時も山田原欽は主君に随行しており、梁文の「資以堂搆之材」記述は、貞享元年のお国入りの時のことを指しているのであろう。



写真③　現在の普賢寺　普賢堂（筆者撮影）

写真④　生身普賢菩薩像の写真（筆者撮影）
開帳の時以外は見ることができないため、庫裏内に写真を額に入れて掲げてあるものを撮影した。

【謝辞】
今回の訳注にあたっては、徳山工業高等専門学校機械電気工学科の藤本浩先生が機会を与えて下さり、普賢寺のご住職桝野省堂氏にご協力いただくよう労を取ってくださった。普賢寺のご住職桝野省堂氏には、貴重な資料を提供いただき、その公開を許可してくださった。また、機械電気工学科の三浦靖一郎先生からは、再三にわたり、地域貢献の観点から有意義であることを説いていただき大いに励まされた。藤本先生、桝野住職、三浦先生にあらためて感謝の意を表しておきたい